

『佐敷の沖縄戦』

導入	これまでの沖縄戦のイメージをひきだす。 「日本兵から きびしい しうち」、「食べものない!」、「にげる」、「家ぞくがなくなる」
----	--

知念芳子(大正14年生まれ)

〈村内避難〉

女子青年として毎日竹やり訓練

私は佐敷村字新里(現 南城市)の^{アガリ サク マヌメ}〈東佐久間前〉の長女として生まれた。戦争当時は20歳だった。

戦が来る前は、壕掘りや竹やり訓練を相当させられた。訓練は新里の製糖工場 のところで、男も女も一緒になって毎日行われた。1,2,3 の号令で「ヤー ヤー」とワラ人形を(竹やりで)突いていた。今考えると、ままごとのようだと思う。青年会として(この訓練を)やっていたが、男は出征していたので、参加者のほとんどは女子青年だった。〈中略〉

板で米俵を担ぐ

日本兵は、新里や旧稲福では人数が少なかった。壕は掘っていたが、兵隊の姿はあまり見かけなかった。

壕掘りが終わると、次は佐敷の学校から坂を2枚担いで運ばされた。小谷集落(現 南城市)の上の坂を通して、旧稲福のザンクビりに上がり、集落の西側にあった製糖工場近くの野戦病院壕(場所不明)まで運んだ。この作業は1日に2回だった。

野戦病院の壕では多くのけが人がいた。このけが人は木の枝で作った床に寝かされ、「水をくれー」と呻いていた。私はその様子をおかしいと思いつつ見ている。その壕は、前が埋まっているので、今もそのまま残っていると思う(現存しているか未確認)。

また、米俵も4人がかりで運んだ。米俵は棒で担いで、(板を運ぶとき)同じような道を通して、稲福の殿(トウ)に運んだ。米を担いで坂を上るのはつらかったが、当時は若かったので難儀とは思わなかった。男がいなかったのも女の人たちが力仕事をしてきた。戦争当時は色々あったが、いい勉強になった。

戦争が始まったとき、日本兵は5,6人しかいなかった。「兵隊はドロボーだ。鶏も盗んでいた」という話を聞いたこともあったが、自分には関係ないと思っていた。

新里集落上の壕で避難生活

昭和20年(1945)の3月(何日かは不明)、自分たちで掘ってあった壕(名称なし)に避難した。父(助造)は義勇兵として出征していたので、私は祖父母(蒲、ツル)、母(カメ)、2

歳下の妹(シゲ)、親戚の佐久間(本家)のおじいさん(名前不明)と、その人の孫で6歳くらいの男の子(セイケン)の7名で避難した。

壕は現在のユインチホテルの北側の崖下あたりに掘っていた。側には泉(新里^{ビラ}坂を上がった右側にあった)があった。私たちはその壕に避難してから、どこにも移動しなかった。

壕から眺めていた日本軍の特攻攻撃

壕のあるところは、ちょうど新里(集落)の後背地になっていた。そのため、壕からは海がよく見えていた。勝連半島(現 うるま市の東南部に位置する半島)の海にアメリカ軍の軍艦が、いっぱい停留しているのが見えた。

日本軍の特攻隊が飛んできて、アメリカ軍の軍艦めがけて特攻攻撃をしていた。しかし、(特攻隊の飛行機は)突撃する前にほとんど落とされて、一機だけ突撃に成功していた。私たちは毎日、そのような状況を見ていた。

水も食糧も豊富な壕生活

旧稲福にいた日本軍が島尻(沖縄本島南部)に移動すると、その後は日本兵に一人も会わなかった。戦争が激しくなっていた時期だったが、私は夕方になると腰に木の枝を差して芋掘りに行っていた。また、殿^{トウ}には米が山盛りに残してあった。以前そこに米を担いで運んで行ったことがあるから、殿から(避難している壕まで)米を担いできた。私たちが捕虜になったあと、殿の米は、住民が取り合っていた。

旧稲福にある慰霊塔の西側にあるカゾーラーヤマ壕(場所不明)にも、タオルや^{かつおぶし}鯉節などの日本軍の物資が相当あった。私はその壕にも物資を取りに行った。

ある日、カゾーラーヤマ壕から現在の稲福の北はずれにあるイランダ(玉城盛明さんの家のあたり)で、アメリカ軍がテントを張っているのが見え、大変だと思って逃げ帰ったことがあった。

旧稲福のザンクビリというところに、〈上玉城〉の畑があり、その畑の下にガマがあった。そのガマには米や乾燥ジャガイモ、ワカメなどの食糧品や、毛布などがいっぱいあった。私たちはそのガマからも米を取っていた。私はそのとき、カリガマーというところで一軒だけ明かりが付いているのを見た。稲福の人たちが、ほとんど島尻に避難している時期だった。

日本兵がいたところは、早く島尻に避難するように言われていたようだ。また、百名^{ひやくな}や喜良原(どちらも現 南城市)あたりの人たちも島尻に避難していたようだ。私の親戚も喜良原に避難していたようだ。〈中略〉

弾は私たちの頭の上をヒューヒューと飛んでいたが、私たちのところには落ちなかった。新里を超えて日本軍のいる島尻に飛んでいた。

私たちが避難していた壕の近くには水が湧くところがあった。その水でご飯を炊いたり、風呂に使ったりしていた。そのため何の不自由もなかった。夜はシンメナービ(大鍋)で米を炊き、ヤギや豚^{つば}を潰して夕飯を食べ、壕の中で寝た。翌朝はアメリカ兵が壕に来たら

大変だということで、朝食をすましたあと、昼ご飯用に肉を詰めたおにぎりを作って山に隠れていた。

私は山の中に隠れているとき、捕虜になった住民を載せたトラックが、新里ビラ(坂)を通って行くのを見たことがある。

当時は芋の時代だったが、(戦争中は)戦争前よりご馳走を食べられた。(そういった面では)喜びながら過ごしていた。その代わりシラミが大変だった。シラミは潰してもずっと湧き出てきて、とても気持ち悪かった。あの体験は思い出として(記憶に)残っている。今でも、(避難していた)あたりを通ると「おかげでご馳走になりました」と、礼をして通る。

情報が少なかったのが幸이었다

避難中、誰からも連絡はなかった。以前に山からカズラ(芋の葉)を摘むために歩いていると、刀を差した日本軍の将校らしき人たちとばったり会って、びっくりした。その日本兵たちは「心配するな。向こうにはアメリカ軍の軍艦がいっぱいいるから、危ないときにはとみぐすく豊見城の軍の壕を探して行きなさい」と言っていた。(この日本兵たちは)きっと偵察のために歩いていたのだと思う。〈後略〉

あなたが知念さんならどうする？にげる？にげない？ ※証言から理由をしめそう

★子ども達と意見交換

↓

知念さんの証言のつづきを読む

◎生き残ることができたターニングポイント

◎印象にのこったこと

- ・捕りよになった後のほうが苦しい生活
- ・食べ物に困っていなかった
- ・佐敷は被害が少ない
- ・どこにも行かなかったことが恥ずかしい